

「疲れた者、重荷を負うものは、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」福音書の中でも最も慰めに満ちた、私たちへのイエスの招きのことばです。

今日の福音にはイエスのおことばだけが響いていて、弟子たちの姿も、群衆の姿もありません。それだけに、今日の福音のおことばは、福音書の枠を超えて、直接的に私たちの心に響いてくるように思えます。イエスのこのおことばは、福音書の中の誰かにというよりは、今このおことばを聴いている私たち一人ひとりに語りかけているように響いています。

「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」私たちのカトリック信者としても信仰は、私たちがこのイエスのおことばを、どこまで身をもって味わうことができているかどうかに掛かっています。「わたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」と言われるイエスとの出会いの経験なしに、そのイエスの下での安らぎを味わう経験なしに、私たちの信仰は、疲れきった身と心に、さらに負わせられた重荷以外の何ものでもなくなってしまう。

「わたしのもとに来なさい。」と呼びかけておられるイエスに応えるためには、幼子のようにならなければなりません。「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」と言われるイエスのおことばに魅力を感じつつも、このおことばに身を委ねることができない私たちがいます。心身に言いようのない疲労が蓄積して行くのを感じつつも、背負い込んだ重荷を片時も降ろすことが出来ないでいる私たちがいるからです。幼子のようにするためには、私たちはあまりにも大人になり過ぎてしまっているのかもしれない。「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。」とイエスは言われますが、日々背負わなければならない重荷があるから、その重荷を背負うことで疲れきってしまっている私たちがいるから、イエスのもとに行くことが出来ない現実の中に、私たちはもがいていることのほうが多いかもしれません。

そのような現実を生きる私たちが、イエスの招きに応えることが出来るとすれば、それは、イエスの招きが私たちの心に届いたからです。私たちの信仰とはそのような出来事です。そしてそれは、わたしたちの上に起こった奇跡のような出来事です。

今日の福音には、イエスの父なる神への喜びに満ちた賛美の声が響いていま

す。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、これは御心に適うことでした。」イエスはご自分の招きに応えた人々がいることを、大きな喜びをもって父なる神に感謝しておられるのです。そのことによって、ご自分を私たちの現実の中にお遣わしになった父なる神のお望みが実現していることに感謝し、父なる神をほめたたえておられるのです。

私たちのカトリック信者としての信仰は、このようなイエスと父なる神の喜びに満ちたいのちの交わりの中にあるのです。父なる神のお望みは、私たちが御子イエスを信じる者となることであり、父なる神から遣わされた御子イエスの願いは、私たちが幼子のようになって父なる神を信じる者となることだからです。

私たちはイエス・キリストを信じる教会の信仰の中で洗礼を受けてカトリックの信者になりました。私たちが受けた洗礼は、神の子イエスの十字架の死と復活によってこの世界のもたらされた、神からの救いに与ることであつたはずで、その救いとは、神の子イエスが私たちの罪の全てを一身に背負って、私たちのために十字架の上で死んでくださったことによって、私たちにもたらされた救いであつたはずで、洗礼を受けるとき私たちは、わたしたちの教会に伝えられてきたこのような信仰を受け入れて、洗礼の秘跡の恵みをいただいて、神の子らとされる新しいのちをこの身にいただいたのです。洗礼の時に、私たちは幼子のようになって、イエス・キリストを私たちの救い主と信じる、新しいのちを生き始めたのです。これこそが永遠のいのちへの道だと信じて、カトリック信者としての信仰の歩みを始めたはずで、今日の福音に響いているイエスの喜びの叫びは、このような私たちについての、イエスの父なる神への感謝と賛美に満ちているのです。今日の福音を通して、私たちの上に響くこのようなイエスの喜びが私たちの心にも伝わってくることを願いたいと思います。もう一度、洗礼の時の、あの幼子のような心に戻って、イエスのもたらしてくださった喜びの中で、イエスとともに喜びに包まれた、信じる者たちだけが味わうことのできる喜びを味わいたいと思います。

そのためにも、今日の福音に響くイエスの招きのことばにもう一度耳を傾けましょう。「疲れた者、重荷を負う者は誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」とイエスは言われます。イエスのもとでは、負っている重荷を降ろしてもよいのです。いや、幼子のような信頼をもって、イエスのもとに私たちの重荷を降ろさなければならぬのです。イエスもとで、イエスとともに父なる神に祈るといふことはそのようなことです。背負って来た重荷のことをしばらく忘れて、イエスのもとにある休息の一時の中で、私たちの心が、

イエスの心のように、謙虚な柔和な心になってゆくことを待ちたいと思います。イエスのもとで、イエスとともに祈るということはそのようなことです。イエスの謙虚さ、イエスの柔和さとは、十字架の道に対する謙虚さであり、十字架の死を受諾する柔和さです。イエスはその全てを、父なる神の御自分に対する御心として、御自分に託された使命として、神の御前に謙虚に、柔和に、屠り場に引かれてゆく羊のように受け入れられたのです。そのイエスが私たちの心にささやきかけてくださるのです。「わたしのくびきを負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」イエスのくびき、イエスの荷とは、イエスが生涯負い通されたイエスのくびきであり、イエスの荷です。それは神の子としてのイエスが父なる神の御手から受けたイエスの十字架です。

「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。」との招きは、十字架からのイエスの招きです。そのイエスの十字架のもとに私たちが負っている重荷の全てを降ろして、自分の負っている重荷を忘れて、イエスの十字架を見上げることが出来るなら、そのイエスに学ぶことができるなら、私たちは力を回復して、再び歩み始めることができるでしょう。その時、私たちは「わたしのくびきは負いやすく、私の荷は軽い」とイエスが言われたことを身をもって感じ取ることが出来ることでしょう。私が負っている荷をイエスがともに負っていてくださることを、心のうちに確信できるからです。

今日もこうしてイエスの招きに応えることが出来た私たちは、そのことを感謝して、イエスが保証してくださっている安らぎをこの身にいただく恵みを祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会  
主任司祭 吉池好高